

「地域子育て支援拠点研修事業」 <旭川開催>

『出会う・つながる・ともに育ちあう

地域子育て支援の意義と役割』

◆開催概要

開催日：平成 21 年 9 月 27 日（日）10：00～17：00

会 場：旭川ターミナルホテル（旭川市宮下通 7 丁目）

主 催：財団法人こども未来財団・NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会

後 援：厚生労働省・（社福）全国社会福祉協議会・北海道・旭川市・旭川市社会福祉協議会

協 力：地域子育て支援拠点研修事業<旭川開催>実行委員会

NPO 法人旭川 NPO サポートセンター

参加者：165 名

（行政 53 名、NPO・任意団体 35 名、その他団体・企業 31 名、その他 46 名）

◆開催趣旨

平成 19 年度より、つどいの広場事業、地域子育て支援センター事業を統合し、児童館などのスペースも活用しながら、地域子育て支援拠点事業（ひろば型、センター型、児童館型）が新たに再編されました。そこで、行政とともに地域における子育て支援拠点間のネットワークを図りながら、地域子育て支援拠点の意義と役割を検証します。また、拠点スタッフ一人ひとりが日頃の活動を振り返り、見識を深め、スキルアップに寄与することを目的とします。

◆プログラム趣旨

北海道では現在、地域子育て支援拠点事業として、ひろば型 26 ヶ所、センター型 195 ヶ所あり、市民団体や民間が独自に開設する子育てひろば、地域の取組みである子育てサロン等、様々な形態の子育て支援拠点が存在します。旭川市においても、ひろば型 1 ヶ所、センター型 3 ヶ所の他、民間主催の多様な子育てひろばやサロンの実践が見られますが、様々な立場で拠点型の子育て支援にかかわる人達が一同に会して研修の機会を持つことは今回が初めての試みとなります。

本セミナーでは、地域背景や課題に考慮し、地域の特色や独自の実践を尊重しながら、それぞれの立場や形態を超えて「地域子育て支援拠点」の意義と役割を再確認します。また、お互いに学び合い、育ち合う内容の研修としながら、各子育て支援拠点や支援者が緩やかなネットワークでつながり、地域全体の子育て力がアップするためのきっかけ、つながりづくりの機会となることを目指します。



◆プログラム

<開会挨拶>

主催者挨拶	押本 篤良さん	財団法人子ども未来財団研修事業部
開催地挨拶	西川 将人さん	旭川市長
実行委員長挨拶	森田 裕子さん	NPO 法人旭川 NPO サポートセンター理事



押本 篤良さん



西川 将人さん



森田 裕子さん

■プログラム1 ■ 基調報告

「地域子育て支援拠点事業の概要と展望」

朝川 知昭さん 厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課少子化対策企画室室長

朝川氏より、子育て支援に関わる様々な国の施策について、スライドを用いて丁寧に説明がなされました。

現在、国が施行している児童福祉法、社会福祉法等の位置づけが、子育て中の人にとって本当にマッチしているのかと考えさせられ、もっとよりよい子育て環境になることを期待したいとの参加者の声がありました。



■プログラム2 ■ ミニ講演&ディスカッション

「地域子育て支援拠点の意義と役割」

<ミニ講演> 渡辺 顕一郎さん 日本福祉大学教授

現代の日本社会では、核家族化が進行し地域のつながりが希薄化する中で、世代を超えた子育て経験の受け渡しや子育て現役世代の支えあいとの関係が分断され、子育てを支える地域ネットワークが機能しにくくなっていることから、家庭とともに地域の子育て力を高める、子どもの発達を支える、児童虐待の重篤な問題の発生を予防するという3つの視点で地域子育て支援が必要であること、拠点型の地域子育て支援は、利用者の子育てに関する知識や情報を高め、ストレスの軽減や孤立感の解消などの効果をもたらし、親同士の支え合いや助け合いの場としての機能が期待できること等について、事例を通してわかりやすく説明してくださいました。

また、親の不全感は子どもに投影されるものなので、支援者は問題点や病理をみつけて「こうなさい」「がんばりなさい」という指導や激励ではなく、その人自身が成長する力を持っていることを信じて寄り添い、「今のままでいい」「よくがんばっているね」と受容や評価を心がけることで、親の子育てへの動機づけが高まるというお話に、地域子育て支援拠点の意義と支援者の役割が具体的に見えてくるミニ講演となりました。



<ディスカッション>

- 【コーディネーター】 渡辺 顕一郎さん 日本福祉大学教授
【話題提供者】 中山 美知子さん 子育て支援センター「おひさま」
(鉄道弘済会旭川保育所) 所長
【話題提供者】 奥山 千鶴子さん NPO 法人びーのびーの理事長
【話題提供者】 山田 智子さん NPO 法人子育て応援かざぐるま代表理事



ミニ講演に引き続いて渡辺さんをコーディネーターに、センター型・ひろば型・多様なひろばでの実践者3名のパネリストが登壇しました。センター型は地元旭川市で平成9年度から保育所併設型の子育て支援センターを開設している中山さん、ひろば型は横浜市でおやこの広場や子育て支援拠点を開設している奥山さん、北海道に多い多様なひろばを代表して札幌市で保育士養成校でのひろばの運営協力や自前の子育て支援拠点を開設している山田さんが、それぞれの立場から開設経緯、拠点の概要、活動理念について発表してくださいました。

3者は立場が違っても、地域に子育て支援の拠点が必要と気づいた時に、職員やスタッフ間で話し合いや学びあいを重ねつつ活動の意義について共通認識を図り一歩ずつ形作っていったところ、その後も現状に満足せずさらなる支援の質の向上をめざして常に学ぶことを大切にして次のステップに進んでいくところが共通していました。

後半のディスカッションでは、渡辺先生が3者の発表から重要なキーワードを拾い出して話し合いが進められ、奥山さんの実践を通して開設当初、親同士の信頼関係ができるまでの広報活動等の工夫や当事者の親、学生、専門職等の様々な立場の人が運営に携わることの大切さ、山田さんの実践を通して親子を温かく迎え入れることの大切さやスタッフの“つなぐ”という役割の重要性、中山先生の実践を通してスタッフが全て担うのではなく親同士のつながりやピアサポートを生み出すかわりを行うことの大切さが確認されました。

最後に、山田さんからは近い将来“地域子育て支援拠点事業”となることをめざして行政とともに協働について学びたい、行政担当者にはそのまちの市民の草の根的な活動に足を運び、それを育て、公的な活動につなげることをお願いしたい、中山さんからは親子を支えていると思いつつ親子に支えられていると感じる、これからも住みよい社会を目指して子育て支援の流れが続くように温かいまなざしを身近なところから作っていきたいというお話があり、奥山さんからは北海道は独自に開設するひろばが多いが、ひろば型は草の根の活動から始まった事業なので、まずは実践者同士が横のつながりを大事にしながら行政ともいい関係をつくってがんばってくださいというエールが送られました。渡辺先生は、子育て支援拠点を利用している親子は、利用後もスタッフや他の利用者に自分や子どもが受け入れられるのか不安を抱えてやってくることを常に心に留めて支援をすることが必要であるというお話で締めくくられ、参加者は大きく刺激を受けて午後の分科会への期待が膨らみました。



■プログラム3 ■ 分科会

<第1分科会>

「我がまちに地域子育て支援拠点をつくろう～市民と行政の協働のあり方」

【コーディネーター】奥山 千鶴子さん NPO 法人びーのびーの理事長

【話題提供者】 中谷 通恵さん NPO 法人お助けネット代表

【話題提供者】 真木 朋子さん 土別市総務部参事・子育てサポート「むっこり」事務局

【話題提供者】 西尾 勝治さん 岩見沢市教育委員会教育部こども課長

【助言者】 朝川 知昭さん 厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課少子化対策企画室長



第1分科会は、奥山さんから、地域子育て支援拠点事業というのは、行政から委託等を受けて実施する事業であるため、拠点を作り上げていくのにどのように行政と市民が連携して取り組んでいくのが良いかという点を3か所の先駆的事例を通して深めていきたいと話があり、始まりました。

中谷さんからは、“誰かが実行しなければ”と思い、新聞に投稿したことがきっかけとなり、行政（保健師）と共に立ち上げた親子連れで集える場から、NPOを立ち上げ、つどいの広場・ファミリーサポートセンターを受託するまでの話を通して、市民としての心意気・成長、具体的な行動例、行政の市民との関係のつくり方についてや行政から受託後の活動について、町直営のセンター型との連携や市民である自分たちが担う意義などのお話をいただきました。

真木さんからは、土別市の職員と子育てサポート「むっこり」の事務局長と両方の立場から、保育サポート講座の開催から子育てサポート「むっこり」を設立、市からつどいの広場「きら」を運営受託するまで、行政から認められることとなった経緯などについてお話がありました。

西尾さんからは、主任児童委員が中心となって立ち上げた子育て親子ひろばの誕生から、ひろばの全体的な広がり、さらに常設型親子ひろばの開設までを主任児童委員と行政が関わり、協働で実施してきたことについてのお話をいただきました。

最後に、奥山さんから、横浜市の子育て支援の状況、拠点の運営団体の公募、運営協議会、協働についても説明があり、助言者の朝川さんからは、本日の研修の成果をぜひ持ち帰って、子育て支援拠点事業だけではなく、子育て支援が評価され広がっていくことを願っていますというお話がありました。

参加した行政担当者にとっては、親子ひろばが生まれた効果、関係機関との連携についてのお話が非常に参考となったと思われ、それぞれの市町村の今後の動向が楽しみな分科会となりました。

質疑応答

Q お母さん方が育児サークルのような自主組織を立ち上げるために、どのように保健師（行政）が関われば良いか、実際に育児サークルを保健師と立ち上げた中谷さんにその時の詳細について伺いたい。

また、拠点事業や育児サークルに参加してこない方への対応をどのようにしているのか。

A 母子保健から地域子育て支援へ切れ目のない支援というのが大事。

参加しない方へは訪問型の支援で対応している。

中谷さんのお話

- “住民目線” から “市民目線” に変わるときがある。
- 住民は行政からサービスを受けるだけ、市民は課題があった場合、自らが解決に向けて動き出す。
- 住民が市民になったときこそ、行政がサポートをして、市民の力を生かすことが大事。

真木さんのお話

- 研修から 3 か月で実践をしたいと行政に訴えた、民間のスピード感と行政の仕組みのギャップ。
- その後、実績を積み重ねて、行政から委託されるまでの信頼関係を築いた。
- 自ら動き出して行政にアピールし、実施したい気持ちを伝えることが大事。

西尾さんのお話

- 地域に限なくひろばをつくるために、主任児童委員の活用を考えて実践した。
- 主任児童委員を後押しし、牽引役として活躍してもらった。
- 1 か所にひろばが集中しないように公平性を考え、行政ならではのひろばを展開している。

<第 2 分科会>

「地域の中の親子の居場所～多様なひろばの取り組み」

【コーディネーター】 杉山 幹夫さん 旭川市社会福祉協議会在宅福祉課主査

【話題提供者】 木村 弘美さん 子育て支援「きららん」

【話題提供者】 中 禮子さん 旭川市千代田地区ふれあいいいききサロン

【話題提供者】 瀧 文枝さん NPO 法人地域生活支援ネットワークサロン
「えぷろんおばさんの店」

【助言者】 渡辺 顕一郎さん 日本福祉大学教授



地域に根ざし異世代の様々な人々の交流の場となっている 3 つの子育てひろばの事例報告から、「子育てひろばならではの」の可能性や課題を探りました。

木村さんからは、元保育園園長の経験から地域で親子が自由に集える場を求めて自主経営する高齢者施設に併設したつどいの場「きららん」について事例報告をしていただきました。高齢者との異世代交流や祭りを通じた地域住民との交流が活発に行われているお話や、利用する親同士で困りごとがあったときにお互いに助け合う相互の関係がつけられているエピソードを通して、「きららん」が地域に根ざして支えあいの場となっている様子がうかがえました。

中さんからは、核家族化等における現代の家族にない 3 世代が入り混じれあえるような場を、地域住民が協力し合って運営している「ふれあいいいききサロン」の事例紹介があり、有資格者等のいない、地域住民の手づくりのひろばにおける運営の工夫点や課題を丁寧にわかりやすくお話していただきました。

瀧さんからは、コミュニティカフェ形式のひろばの運営に至るまでの経緯や、地域住民や障がいを持った人などが社会参加としてボランティアや何らかの形で運営に関わっているエピソード等、運営面における工夫をお話していただきました。

渡辺先生は、3つのひろばに共通するキーワードとともに、個々の今後の展開における考え方や手法について、わかりやすく助言してくださいました。また、地域社会が壊れはじめ、地域の大人同士の支え合いや助け合い等のつながりが希薄になったことが原因となり、子どもたちが子ども同士も含め、幼いときからいろいろな人と交わることができなくなっているということをお聞きし、今こそ地域の大人同士がつながり合い、子どもたちが多様な人々とのかかわりの中で育つことができる地域社会を作っていくことの必要性に気づきました。

<第3分科会>

「みんなで語り合おう～スタッフフォーラム」

- | | | |
|------------|----------|------------------|
| 【コーディネーター】 | 新澤 拓治さん | 光が丘子ども家庭支援センター所長 |
| 【ファシリテーター】 | 大沢 礼子さん | 子育て支援「はじめの一步」 |
| 【ファシリテーター】 | 島倉 千香絵さん | 子育て支援センター「おひさま」 |
| 【ファシリテーター】 | 木下 三恵子さん | 子育て支援センター「ねむのき」 |
| 【ファシリテーター】 | 宮川 まさこさん | NPO 法人子育て応援かざぐるま |
| 【助言者】 | 相場 幸子さん | 母子相談室「みみずく」主宰 |



第3分科会では、7～9人の5グループに分かれて「午前のプログラムの感想」「日々自分達が大切にしていること」を中心に活発な話し合いを展開し、その内容を基に各グループで子育て支援に大切なキーワードを3つ考えて発表しました。

最後に、助言者の相場さんより、臨床心理士のお立場から利用者とのかかわる上での基本的な視点についてのお話と、コーディネーターの新澤さんより、日々親子に向き合う実践者の立場から子育て支援者として大切にしたいことのまとめがあり、「今日、みなさんで話し合った内容を“旭川メッセージ”としましょう！」と提案がありました。

各グループから出されたキーワード

- 「利用者の方の話に耳を傾ける」「つながりを大切に」「個々の気持ちを受けとめる」
- 「関連機関との連携を密に」「信頼関係が大切」「人と人とが場を作る」「寄り添う」「大切」
- 「つなぎ役」「聞く・聴く」「輪」「共感する」「一緒に考える」

助言者の相場さんのお話

- 相談の中で目に見える問題行動の裏の思いに気づくことが大事であり、親の気持ちをよく聴いていくと支援の方向が見えてくる。
- 来た方へ「よく来てくれたね」の気持ちからスタートし、その人の良いところを見つけて、言葉にして伝えることが大事。
- “Iメッセージ”と“YOUメッセージ”を活用すると効果的。

コーディネーターの新澤さんのお話

- 初めて利用した時の気持ちや印象を忘れないで生かしていくことが必要。
- 利用者が持っている良い力に気づき、伸ばせるように支援していくことが大切。
- 支援者自身が安心して元気でいられることが、支援への力になる。
- 親のエンパワーも大事だが、支援者のエンパワーも大事！

子育て支援で大切にしたいこと
旭川の支援者からのメッセージ

大きな輪の中で(地域)

人を大切に思い信頼関係を作る場
そこは人と人が作り合うもの(それがひろば)

・寄り添う

・共感する

◎つながりが大切

・利用者の方の話を
耳を傾ける

・個々の気持ちを受
けとめる

←つながりの為に大切な要素→

・一緒に考える

・聞く、聴く



・関連機関との連携を密に

・つなぎ役

■プログラム4■ 全体会

- 【コーディネーター】 森田 裕子さん NPO 法人旭川 NPO サポートセンター理事
【報告者】第1分科会 奥山 千鶴子さん NPO 法人びーのびーの理事長
【報告者】第2分科会 杉山 幹夫さん 旭川市社会福祉協議会在宅福祉課主査
【報告者】第3分科会 新澤 拓治さん 光が丘子ども家庭支援センター所長
【総括】 渡辺 顕一郎さん 日本福祉大学教授
【総括】 相場 幸子さん 母子相談室「みみずく」主宰



一日の研修の総まとめとなる全体会では、実行委員長である森田さんがコーディネーターとなり、各分科会のコーディネーターよりそれぞれ話し合われたことが発表されました。

まずは、第1分科会コーディネーター奥山さんより開催地の「あさひかわ」の頭文字をとって、

「あ」 アピール、アクション、あきらめるな

「さ」 颯爽とやっていく（新聞に投稿するように）

「ひ」 一人ひとり丁寧に見ていく

「か」 感度良く（市民の言葉に反応できる行政）

「わ」 わいわいと（NPOの独りよがりではいけないので、市民を巻き込んでみんなでわいわいと）

旭川の子育て支援が盛り上がることを祈っての報告となりました。

第2分科会コーディネーター杉山さんからは、地域に根ざし異世代の様々な人々の交流の場となっている3つの子育てひろばの事例を通して、「子育てひろばならではの」可能性や課題についての報告がありました。実施形態は違っても3者に共通する部分は、地域住民を巻き込んでしっかりと地域に根ざしていて、支援者側が全てをお膳立てするのではなく、地域住民が関わりながら知恵を出し合いながら運営されていることであり、財源については、情報収集し知恵を絞りながら財源を確保していくことが重要であること、今後の課題は今の体制を次の世代等につなげること、次世代につながる運営を意識することにより、次につながる仕組みを作っていくことが大切との報告がありました。

第3分科会コーディネーター新澤さんからは、各自がひろばのスタッフとして大切にしていることを発表し合い、各グループで3つのキーワードとしてまとめたことが発表されました。

●人と人が場を作る～関係機関との連携等も含めて。1人で悩まず人とのつながりの中で対応

●つなぐ・つなぎ役～人と人をつなぐことは永遠のテーマ

●輪～ネットワークもその1つ。たくさん輪が広がるといい

●大切～子どもは大切な宝。その大切な子どもを育てる親も大切。支援している人も大切

●共感する～わかっているけれど難しい

●聞く・聴く・訊く～わからないことは相手に尋ねる。しっかり聴く。傾聴は難しい

以上を、参加した皆の“旭川メッセージ”としたいと締めくくられました。

それぞれの分科会報告を受けて、助言者である渡辺さんと相場さんより総括があり、最後にフロアから感想が述べられて全体会を終了しました。参加者が学んだことをそれぞれの現場に持ち帰り、明日からの実践に向けて意欲を高めるようなものとなりました。

渡辺さんの総括

親には、「この子のせいで幸福ではない」と思ってほしくない。「この子のお陰で親として育てられ、幸福」と思えるように支えることが大切。子育て支援の意義として以下の3つがある。

①子どもを健やかに育む

②孤立した子育てから開放する

③女性として、ひとりの人間としての生き方を応援する

まずは何気ない会話から信頼関係を築く。利用者はスタッフの人となりを知ってから話そうと思う。支援者は、その子どもなりのスピードで変化していることを丁寧に親に伝えることが大切。できて当たり前でなく、あなたががんばっているからですよと評価する。ひろばの支援は、重篤な虐待予防の最前線に立つ仕事でもあるので、誇りを持つと共に自己研鑽に務めることが求められる。

相場さんの総括

子育て支援の現場は進んでいると感じた。今日の研修会では「今の親は困ったものだ」という親批判の話が全然出なかった。行政も力を入れている。いろんな立場の人が研修に参加していたが、欲を言えばもっと男性の参加が進んでいくとよい。最後に臨床心理士の立場からのまとめをお話すると、

- まずはひろばに来てくれたことに感謝の気持ちを持つ

日常の何気ない会話から信頼関係を築く。

- エンパワメントの視点

問題を追及するのではなく、その人のよいところやできているところを見つけて認める（言語化する）ことが大切。エンパワメントは重層的、連鎖的に作用するので、行政が支援者をエンパワーすると、支援者が親をエンパワーし、親と子どもは互いにエンパワーしあうことにつながる。

- 聴く・寄り添う・共感する

わからないことがあれば、そのままにせず相手に質問して確かめる。聞いてよいかどうか迷う時は「質問してもいいですか？」と聞いてもよい。「どんなことができることを望んでいるのですか？」と気持ちをすっきり聴いてあげた上で、「何かできることがありますか？」と聞く。

こちらからアドバイスをする時は、「私はこんなふうに思うけどどうかしら？」と相手を尊重し、相手が命令されたと思わないように配慮する。また、「○や◎や△の中でどれならできそう？」といくつか提示して聞いたり、「前にこんなふうにうまくいきましたよ」と経験を話したりするとよい。

<閉会挨拶>

山田 智子さん

NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会理事および
NPO 法人子育て応援かざぐるま代表理事

<総合司会>

桑原 康彦さん

北海道上川保健所（北海道上川保健福祉事務所保健福祉部）
子ども・保健推進課子ども未来係長